

ハイリスク新生児の母乳栄養の推進

松戸市立病院

竹 内 豊

研究目的

母乳の栄養学的な優秀性と母子相互作用に於ける重要性は既に多方面から検討され、周知の事実である。しかし、実際、母乳栄養の普及度は必ずしも満足の行く数値とは云えない場合もあり、さらに未熟児や sick newborn で、児が母と離れて施設に収容されている場合には、かなり低率になることが懸念される。初乳の投与については、尚のことと思われる。そこで、私達の施設に収容されている児の実態について調査し、今後、母乳栄養について積極的な推進を行ってみたい。

58年度調査

乳児検診において、栄養法を調査し、母乳栄養の頻度をみた。私達の施設に収容したハイリスク児の栄養内容について後方視的に調査した。対象とした児は生後3日以内に入院して日令14日以降に退院した児285名である。

結 果

表1にA施設の1ヶ月検診とB施設の3ヶ月検診の栄養法を表す。B施設では医師、スタッフが母乳栄養に強く関心をもち、母への指導も積極的であり、完全母乳栄養児58%、混合栄養児も加えると母乳を飲んでいる児は91%に達している。一方A施設では、やや指導に不足があつて76%にしかならない。医師や看護スタッフの熱意がどれほどに左右するかを示している。

表2に私達の新生児科病棟入院例285例について栄養内容を分けてみた。少くとも入院当初2週間に母乳の方をより多く飲んでた児は全体で67.4%、早産児で75.5%、満産児で58.7%であり予想したのとは逆に満期産児で成績が悪かつた。(すぐに退院できそうだからと思つて運搬しなかつたのか?)

表3に母乳が始めて運ばれてきた日の平均日令

を示した。全体の平均で7日であり、とても遅いと思つた。とくに、院内出生の早産児が平均6.9日であり、母が退院してから運びはじめる例が多いことを示しており、改善の要を痛感した。

表4に乳汁の性状や運ばれた日令から初乳が投与されたと考える症例の頻度をみたが、母乳がかなりの量で投与された症例の内、院内出生児で41.7%、院外出生児では僅かに11.5%しなかつた。

表5参考に、全国の未熟児新生児収容施設に印象について御意見を伺つたが、まだまだ人工乳の投与は多いようであるが、しかし中には熱心に母乳栄養を進めている施設もあり、これに近づくべく努力の必要性を感じた。

表6、私達の対策として

- ① 産科先生に母乳に関する強い感心を持っていただくこと。
- ② 母に母乳の重要性を再認識してもらうこと。
- ③ 家族に、運搬に必要な器具の紹介、貸与を行う。

を積極的に行う。

ハイリスクを中心として、少しでも母乳栄養の推進が行えれば、おそらく一般乳児の母乳栄養の占める割合も向上するものと期待される。

表1 1カ月乳児の栄養（松戸市内A施設）

1983, 4, 12

検診数	ほとんど母乳	混合栄養	ほとんど人工乳
413	126 (30.5)	189 (45.8)	98 (23.7)

3カ月乳児の栄養（柏市内B産院）

1983,

検診数	ほとんど母乳	混合栄養	ほとんど人工乳
254	147 (57.9)	84 (33.1)	23 (9.0)

表2 ハイリスク児の栄養

松戸市立病院新生児科 1983, 1, 12

	主に母乳 (A)	主に人工乳 (B)	$\frac{A}{A+B} \times 100$
37週未満	111	36	75.5
37週以後	81	57	58.7
合計	192	93	67.4

表3 母乳が始めて運ばれて来た日令
(例数)

	院内出生	院外出生	合計
37週未満	6.9(29)	6.3(82)	6.4(111)
37週以後	5.1(7)	8.0(74)	7.7(81)
合計	6.6(36)	7.1(156)	7.0(192)

表4 初乳が投与されたと思われる例数

	院内出生児	院外出生児
3 7 週未満	11/29	10/82
3 7 週以後	4/7	8/74
合 計	15/36 (41.7%)	18/156 (11.5%)

参考 全国のハイリスク未熟児，新生児収容施設の印象 (36施設)

収容児の栄養内容は

ほとんどが母乳栄養	人工乳栄養の方が多い	母乳と人工乳栄養
8施設	20施設	8施設

始めて母乳が運ばれて来る日令の平均は

3日以内	4日位	5日位	6日位	7日以後	不明
9施設	6施設	6施設	4施設	7施設	4施設

母乳例の中で初乳が与えられる割合は

ほとんど全例	半数位	数少ない	不明
9施設	13施設	14施設	2施設

表6 収容ハイリスク児の母乳栄養をすすめる為に

地域産科施設への協力依頼

母への連絡，家族へのより積極的な指導

搾乳器具，運搬器具の紹介，貸与



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的

母乳の栄養学的な優秀性と母子相互作用に於ける重要性は既に多方面から検討され、周知の事実である。しかし、実際、母乳栄養の普及度は必ずしも満足の行く数値とは云えない場合もあり、さらに未熟児やsick newbornで、児が母と離れて施設に収容されている場合には、かなり低率になることが懸念される。初乳の投与については、尚のことと思われる。そこで、私達の施設に収容されている児の実態について調査し、今後、母乳栄養について積極的な推進を行ってみたい。